

総合学習における福祉教育活動の実践 ～車椅子体験学習を通して～

地元の社会福祉協議会と連携しながら、児童・生徒の障害者理解という観点から、車椅子の操作・体験の学習をメインに、学校からの要望に応えながら実施している。

社会福祉法人 **有誠福祉会**

〒779-3232 徳島県名西郡石井町石井字城の内563

TEL：088-674-7200／FAX：088-674-8655／E-Mail：yuseien@lime.ocn.ne.jp

【法人の概要】

法人設立年：昭和55年4月

経営施設、事業（数）：6施設、13事業

経営施設、事業（種別）：

養護老人ホーム：1／特別養護老人ホーム：1／ケアハウス：1／認知症対応型共同生活介護事業所：2／デイサービス：3／居宅介護支援事業所：2／在宅介護支援センター：2／訪問看護ステーション：1／身体障害者療護施設：1／身体障害者療護施設（通所事業）：1／ホームヘルプサービス：1／配食サービス事業：1／市町村障害者相談支援事業：1／地域活動支援センター事業：1

【法人の理念・経営方針】

社会福祉法人有誠福祉会は昭和55年設立、徳島県で初めての身体障害者療護施設を立ち上げ、障害者支援をその源流におきながら、現在では高齢者福祉においても、サービス提供できる体制を構築している。

障害者、高齢者ともにその柱となる施設を設けながらも、地域での生活を継続していくためには、在宅サービスの推進は必要不可欠であり、その推進と質の向上に向けた取り組みにも力を入れている。

その結果、入所系施設の役割と使命を明確にするとともに、在宅分野においては、安心して住みなれた地域で生活が出来るように、在宅福祉サービスが独自性を発揮しながらも、連携をし、それぞれの持つノウハウを提供し合い、障害者・高齢者等の各分野をトータルサポート出来る仕組みの構築を目指し、共存共生の福祉文化を持つ地域づくりに努めている。

実施施設の概要

施設名：身体障害者療護施設 有誠園

施設種別：身体障害者療護施設

活動開始年：H14年11月

活動の頻度・時間：年間5回程度 1回あたり1～2時間

活動の対象者：地域住民／児童／生徒 等

活動実施の背景、実施にいたった理由

当社会福祉法人の身体障害者療護施設では、在宅障害者についてもヘルパーや通所・短期入所事業を通じ支援を実施している。その当事者が住みなれた地域で生活を続けていくためには、日常生活支援が重要でありその実践のため、障害者相談支援事業を当該町から委託を受けて、取り組んでいる。

その事業で平成13～14年度にわたり、地域との交流と、誰もが住みよい町づくりを目指して「バリアフリーガイドマップ」作製を、地元の中学・高校生とボランティア、障害者や関係機関の方々と行った。これをきっかけに、活動で広がった輪が、学校教育という現場において「総合的な学習の時間」での福祉教育へと広がりを見せ、今では地元の社会福祉協議会と連携しながら、児童・生徒へ障害者理解という観点から、車椅子などの操作・体験の学習を学校からの要望に応えながら実施している。

実施内容

本活動では、車椅子の操作をメインに置く体験学習であるが、その学習の導入時には必ず障害者の生活や、その想いを児童・生徒に語りかける。それは、今日の前にある車椅子は「輪の付いた楽しいイス」ではなく、「一人の人の生活に必要で、欠かせない大事な道具」であるという理解をして欲しいからである。

実施する体験は基本的に、①車椅子がどういったものであるか、②操作方法、③注意点や留意点はどのようなことか、といったことを説明し実演する。その後は実際に操作をしてもらうが、この時、体育館で実施したり、校舎外へ出て自分達の生活圏を車椅子で移動してみたり、自分一人で操作をしたり、押してみたり、押してもらったり等学校の考えや方針などにより体験の実際は様々である。また、実施時間や天候など、その他の要素も総合的に勘案して内容を決定し、実施している。

車椅子は、操作するまでは簡単そうな楽しい乗り物に見えるようであるが、実際に町中で操作してみると、歩道や

道のデコボコ、段差に予想外の動きをしたりし、知らず知らずに児童・生徒の真剣さを引き出している。

活動効果

学習後はそれぞれの学校でまとめをして、参観日での発表や人権教育として更に学習を深めてくれたりと、様々な形で以後の学習に取り組んでくれている。また、これをきっかけに、当施設へ交流学習に来てくれたりと、新しい広がりも見られたりしている。

学校からは「学習した児童達は、周りの人々とのふれあいを通して自分の生活を広げようとする姿が見られるようになった」、「さらに頑張ろうと意欲が湧いてきて、募金活動やステッカー作りを実行している」という声を頂いている。

また、児童達からも、「町で見かけた足の不自由な人に、大丈夫か声をかけた」、「車椅子に乗っている人が困っていたら助けてあげたい」、「車椅子に乗ってみて、町にはたくさんのバリアがあることがわかった」というような感想を聞かせてくれた。

この体験を通して、車椅子の大変さを感じ、またそういう人々へどうしたらよいかを考えるきっかけにしてくれていると思う。

今後の課題

障害者の方々等との接点は日常生活では中々もてない中、学習の一環でこのような取り組みが出来ることは重要であると思う。社会福祉法人が行っている様々な事業を、存する地域の一つの社会資源として、このように活用してもらうことは一つの使命でもあると考える。

人と人との繋がりや思いやりといった、大事にしないといけないものが希薄な現代で、福祉の持つ、人へのやさしさや温かさといったものこそ、今皆が再認識せねばならない大事な「要」であり、それをこういった活動を通じて伝えることが我々には出来るはずである。

今後は、我々が持つノウハウを発信する「内から外へ」という活動が出来ていけるかが課題であるが、また新たな輪を広げていけるよう進んで行きたい。

